ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

目　次

●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
『沖縄戦の全学徒隊』発刊／ひめゆりガイド講習会を開催／国際平和博物館会議参加／日本平和博物館会議加盟／2008年度学芸員実習／「ひとりひとりの戦跡めぐり」開始／「ひめゆり学徒隊のアニメ」原画作者決定／2009年度　開館20周年記念事業
●「相思樹」(コラム)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
●仲宗根政善日記抄(40)・・・・・・・・・・・・・・・8
●ひめゆり学徒隊の戦跡／No.2 兵器廠壕・・・・11
●本棚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
●声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
●資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第42号
2008.12.31

資料館トピックス

◆『沖縄戦の全学徒隊』発刊

2008 年 6 月 23 日、『ひめゆり平和祈念資料館　資料集 4「沖縄戦の全学徒隊」』を発刊しました。

この資料集は、開館 10 周年に開催した企画展「沖縄の全学徒たち」展で収集した資料をもとにして、沖縄戦において戦場動員された沖縄の全学徒隊の学校概要と戦場体験を一冊にまとめた資料集です。

沖縄戦時には、ひめゆり学徒隊だけではなく、沖縄県下にあった師範学校・中等学校生すべての学生が戦場に動員されました。男子学徒の多くは日本軍の最下位の兵士として、女子学徒の多くは看護補助要員として戦場に動員されました。

ひめゆり学徒隊の引率教師であった故・仲宗根政善先生は生前、「ひめゆりだけではなく、沖縄の全学徒たちのことを伝えたい」とおっしゃっていました。その意志を継いで開催されたのが、開館 10 周年企画展「沖縄の全学徒たち」展でした。企画展開催から 10 年目の今年、企画展後に寄せられた新しい情報などを加えてあらためて資料集にまとめ、より多くの方に沖縄の全学徒隊について知っていただく機会になるようにと出版しました。

本資料集では各学校・各学徒隊の概要、学徒たちの戦場体験証言に加えて、明治期以降、沖縄で行われていた教育や、学徒たちの戦後についても収録しました。資料編には学徒の戦場動員に関連する法律や戦跡地図、学徒たちが配置された壕内の見取り図なども収録しており、沖縄戦において全学徒隊がどのように動員され、どのような戦場体験をしたのかを総合的に知ることのできる一冊となっています。

作成にあたっては、資料の提供など、学徒たちが所属した各学校の同窓会の方々にもご協力いただきました。

『ひめゆり平和祈念資料館　資料集４　「沖縄戦の全学徒隊」』

編集・発行　財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立
ひめゆり平和祈念資料館
2008 年 6 月 23 日発行

目次

巻頭グラビア
序章　沖縄の近代教育と「旧制中等学校」
　1．沖縄の近代教育
　2．「旧制中学校」制度とは
1章　沖縄の学徒隊の概要
　1．戦時体制下の沖縄の中等学校
　2．沖縄戦下の「沖縄の学徒隊」
2章　沖縄の 21 の学徒隊
　1．沖縄師範学校男子部
　2．沖縄県立第一中学校
　3．沖縄県立第二中学校
　4．沖縄県立第三中学校
　5．沖縄県立農林学校
　6．沖縄県立水産学校
　7．沖縄県立工業学校
　8．那覇市立商工学校
　9．開南中学校
　10．沖縄県立宮古中学校
　11．沖縄県立八重山農学校
　12．沖縄県立八重山中学校
　13．沖縄師範学校女師部
　14．沖縄県立第一高等女学校
　15．沖縄県立第二高等女学校
　16．沖縄県立第三高等女学校
　17．沖縄県立首里高等女学校
　18．沖縄積徳高等女学校
　19．昭和高等女学校
　20．沖縄県立宮古高等女学校
　21．沖縄県立八重山高等女学校・沖縄県立八重山農学校
3章　学徒たちの戦後
　1．男子学徒たちの戦後
　2．女子学徒たちの戦後
資料編
　■解説
　■関連法規
　■戦跡地図・壕内見取り図
　■実物資料リスト
　■関連年表
　■用語集

価格　1,200 円

ひめゆり平和祈念資料館（電話 098-997-2100）にて販売しております。

◆ひめゆりガイド講習会を開催

2008 年 9 月 26 日、戦争を体験していない世代の職員が中心となって、「ひめゆりガイド講習会」を開催しました。この講習会は、日ごろ多くの観光客をひめゆりの塔や資料館に案内している平和ガイドやバスガイド、タクシー運転手のみなさんに、より深くひめゆりのことを知ってもらうことを目的に企画しました。

資料館の概要と沿革、沖縄戦の経過やひめゆりの塔敷地内に何があるのかなどを、職員が担当を決めてそれぞれ解説しました。その後、ひめゆりの塔のガマ（伊原第三外科壕）の生存者である、宮良ルリ証言員から戦場体験の講話をしてもらいました。受講者のみなさんは大変熱心に耳を傾けていました。

今後のひめゆりの塔敷地内の整備についても報告をしました。受講者からは塔周辺の整備について「ひめゆりの塔うしろのガマをもっと見せられるようにしてほしい」、「案内をするために、もう少し広いスペースを確保してもらいたい」といった要望が聞かれました。

会場では、次世代の職員が資料館のことを伝えようと奮闘する姿を当館の証言員（ひめゆり学徒隊生存者）たちが温かく見守ってくれました。

受講者から寄せられたアンケートには「体験者の講話を聞けてよかった」といった感想が多く見られました。ガイドのみなさんは、なかなか体験者の話を聞く時間がないということを知ることができました。また、「ひめゆりの塔の敷地内に何があるのかを詳しく聞けて参考になった」といった意見も多くみられました。お寄せいただいた意見を参考に、今後も継続してひめゆりガイド講習会を開催し、ガイドのみなさんとの意見交換・交流の場にしていけたらと思います。

◆国際平和博物館会議参加

2008 年 10 月 6 日から 10 日の日程で、第6回国際平和博物館会議が京都市と広島市で開催されました。平和博物館の学芸員や、平和に関わる研究、教育を行っている大学の研究者や学生、平和運動に関わる市民などが世界各地から集まり、当館からも、本村つる館長に加え、学芸課、総務課の職員5名が参加しました。

国際平和博物館会議は、平和のための活動にとりくむ博物館どうしの交流を目的に、1992 年以来、イギリス、オーストリア、日本、ベルリン、スペインとほぼ 3 年おきに開催されています。日本では、1998 年の第 3 回大会以来、二度目の開催となりました。

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン氏（平和のための博物館国際ネットワーク（ＩＮＭＰ）統括コーディネーター／ブラッドフォード大学教授）の基調講演のほか、シンポジウム、19 のテーマに分かれての分科会が持たれ、各地の博物館や運動の経験交流や知的交流が活発に行われました。

8 日の午後には、日本の平和博物館市民ネットワークの交流会が開かれました。毎年開かれている交流会ですが、今回は国際会議の場を利用したこともあり、海外でこの会議のことを知って初めて参加された美術館の方がいらっしゃるなど、「平和」と冠していないけれども「平和」のための活動を行っている館の方々との出会いの機会にもなりました。

世界各地から集まった「平和のための活動」を行う人々は、それぞれの歴史的文脈、社会的文脈のなかで活動しており、文字通り戦火の中での活動や、マイノリティの人権問題を訴える活動、「戦後」に継続する暴力に対応するなど、さまざまな試みがあることを知る機会になりました。また同時に、「平和」の意味合いはそれぞれの文脈で異なっており、「平和のための活動」は一律化できるようなものではなく、それぞれの場で模索し続けることでしかないということも見えてきました。

世界中の平和を求めて活動する人々との出会いは、当館職員にとって、励まされるような出来事でした。会議の場で出会ったイタリアの方が、早速会議終了後に沖縄まで足をのばし当館を訪ねてくださるなど、当館の経験が、別の国の別の活動に影響することを実感し、嬉しく、心強く思われました。

◆日本平和博物館会議加盟

2008 年 11 月 6 日、沖縄県平和祈念資料館で第 15 回日本平和博物館会議が行われ、当館は、今会議から加盟館となりました。加盟は、立命館国際平和ミュージアムの推薦を受けてのもので、公立ではない館としては立命館国際平和ミュージアムに次いで、当館が 2 館目となります。

日本平和博物館会議は、1994 年に第1回会議が広島平和記念資料館で開催されて以降、毎年開催され、平和の実現を目的に活動する日本の博物館同士が、よりよい平和博物館運営のために必要な知識や経験を共有し、課題などを話し合ってきました。

今会議では、館内撮影の規定をどのようにしているか、予算が縮小していくなかでどのように運営していくのか、学校現場にどのような学習が提供できるかなど、日頃の課題や悩みも含めて話し合われました。

当館からは、本村つる館長、普天間朝佳学芸課長、諸見徳一総務課長の3名が参加し、各館との人的、知的交流を図りました。

◆ 2008 年度学芸員実習

2008 年 9 月 2 日から 9 月 13 日までの約 10 日間の日程で、琉球大学国際言語文化学科 4 年次の大城香織さんと大城はるなさんが、学芸員実習を行いました。

特別展などの企画を手掛ける企画部会、ひめゆり学徒生存者の戦前・戦中・戦後の記録を収集・整理している記録部会、来館者の感想文を感想文集にまとめる感想文部会にも参加しそれぞれの部会員であるひめゆり学徒の生存者の方とも交流を深めました。また、ひめゆり学徒隊関連の戦跡をめぐるフィールドワークや南風原文化センターや沖縄県平和祈念資料館など関連施設の見学や職員の方との質疑応答なども行いました。

当初は緊張していたふたりですが、慣れるにつれ積極的に生存者や職員に話しかけ、自ら吸収する姿勢が見られました。

香織さんは生存者の証言を聞き、「心に響く」ことの重要性を実感し、はるなさんは記録部会への参加を通して生存者の記録を残すことが「次世代が戦争という事実を知る重要な手掛かりになる」と感じたようです。

●実習生レポート①

沖縄県の若者と平和教育について（抄録）

琉球大学法文学部人間科学科　人間行動専攻 4 年次　大城香織

2. 平和教育の課題解決のためには

上で述べたように、多くの県内学校の平和教育は特設授業として持続しているが、その内容は深みがなくマンネリ化している感が強い。私には、その最大の問題点は「学習目標が抽象的で分かりにくい」点にあるのではないかと思えてならない。

沖縄戦をテーマとした平和教育の目的を端的に言うと「私たちの住んでいる地で起きた悲惨な戦争体験を知り、先人たちが築いてきた平和の上に現在の人間的な生活があるという事実を知ること。そして武力戦争に巻き込まれず、加担せず、平和の尊さを発信していくこと。」であろう。それは平和教育の核であり、それを失えばもはや平和教育とは言えない。しかし、それをそのまま生徒たちへの学習目標としてしまうのはあまりにも抽象的すぎるのではないか。平和教育の意義としても、沖縄戦を学ぶためのきっかけとしても失ってはならないものであるが、これをそのまま学習目標としてしまうと生徒には結局「戦争は悲惨だ」、「平和は大切だ」という感覚の部分しか残らない。この理解レベルでは県外の人に沖縄戦を説明するなんて到底無理であるし、何より「いつ・どこで・何があったのか」という具体的な理解レベルまでおとしていかないと、結果としては生徒に「同じ授業の繰り返し」と感じさせ、沖縄戦を学ぶことについてマンネリ感すら生み出してしまう。

また、このような現状の要因として、県外の観光客向けに沖縄戦の平和学習の需要が広がっている中で「県外の人に求める理解レベル」と「沖縄県民に求める理解レベル」が曖昧となっていることも一因であるよ

うに見える。

どちらにしても、今の平和教育の現状を打開するためには「自分たちが生活している地域なのだから、沖縄県民は県外の人よりも沖縄の歴史について知っているべきだ！」というスタンスに立った、より具体的な学習目標の設定が必要である。また、史実を具体的に知ろうとするよう意識を高めるためには、史実を自分の生活につなげて考えられるような学習の進め方、工夫が求められる。

しかし、具体的な学習目標を設定する上で考えられる問題点もある。戦争とは一人一人の体験から語られるものであり、その体験は皆それぞれ違う。ひめゆりの証言員の先生方もおっしゃっていたが、同じひめゆり学徒でも体験したことは同じではない。このように、一般住民においても年齢や状況によってそれぞれの立場があるし、軍として徴兵された沖縄県民や、本土の日本軍、アメリカ軍、強制的に徴兵されたアジア諸国の人々、従軍慰安婦とされてしまった人々・・と、語るべき記憶は数多く、かつ根深い。大まかな沖縄戦の筋として何を具体的に語るのか、知るべき記憶とするのかという選択は、とても難しい問題である。

この難しい問題について私なりに言えることは「どのような授業であるにしろ『これが沖縄戦だ』と確定することは絶対できない」ということだ。全てを把握することが出来ず結果的に内容が偏ってしまったとしても、「沖縄戦とは一概にこうだ、とは言い切れないほど根深くずっしりと重いものであり、だからこそ学び続けることが求められる」点をしっかりと生徒に伝えることが大切なのではないかと思う。

●学芸員実習レポート②
次世代としての姿勢

琉球大学法文学部人間科学科　人間行動専攻４年次　大城はるな

戦後 60 数年という時の流れによって、現在では沖縄戦当時を知る戦争体験者が徐々に減少しています。そこで現在あちら此方で叫ばれているのが、戦争の記憶を風化させず、如何に次世代へと継承するかという事です。その為、現在では様々な取り組みが行われています。例えば平和ガイドの講習などによる育成、戦争体験者の証言の記録、保存、収集。また壕といった戦争遺跡の保存、研究などです。この様な活動を通し次世代へと継承、平和を発信するという取り組みが行われています。

しかし、受け継いでいく若い世代にあたる私たちに目を向けてみると、私たち次世代はしっかりと受け継ぐ姿勢が取れているのでしょうか。今回実習を通して、私を含めた次世代が、受け継ぐ姿勢をまだ十分に整えられていないのではないだろうかという疑問を持ちました。そこで今回は、私が今出来る次世代としての姿勢について考えいきたいと思います。

私たちに必要な姿勢とは、事実の本質的、理性的理解だと思います。例えば、ひめゆり平和祈念資料館では「戦争と教育」という事をメインテーマとし、まだ 10 代の学徒たちを戦争へと導いてしまった当時の教育のあり方について、様々な問題提起をしています。これらの展示、証言の受け止め方は来館者の自由であり、十人居れば、十人十色です。もちろん研究教育機関としての博物館では、こうすべきであるといった事を押し付けるべきではないでしょう。しかし展示を見る側として私たちは事実

の本質的かつ、理性的な理解に努める姿勢が必要だと思います。まずはこの様な理解がなければ、私たちは物事を正しく判断することが出来ないという事です。

そして歴史とは単なる過去ではなく、現代の観点から過去を見た一つの物語という側面を持っているという事を知るのが大切だと思います。歴史とは、現代という観点から編集された過去の物語であるという事です。そのため現代の観点に反したものは、どうしても見えにくい仕組みになっています。私たちはその事を意識せずに、歴史というものを捉えがちではないだろうかと思います。その事を意識した上で、私たちは何度も自分の目で見て、耳で聞いて知り、自分自身の頭でしっかり考えることが必要だと思います。そうする事でやっと、戦争の悲惨さや非人道性といった事が解るのではないでしょうか。

私たちは次世代として平和を求め、訴えるためにも、戦争という歴史をちゃんと理解する事が重要です。そうした理解によって、平和を守る事の大切さや、意味を一人一人が考えれるのではないでしょうか。

◆「ひとりひとりの戦跡めぐり」開始

当館では、「証言員」（当館展示室内で証言を行っているひめゆり学徒生存者）ひとりひとりの戦争体験を現地で詳細に聞きとっていこうという「ひとりひとりの戦跡めぐり」をスタートしました。第 1 回を 11 月 7 日に実施し、11 月 25 日、12 月 4 日と、現在までに 3 回を数えています。

沖縄陸軍病院のあった南風原町の黄金森や南部撤退後に入った壕、喜屋武海岸など数カ所で、幼い頃のこと、女師・一高女での学園生活のこと、動員、陸軍病院での活動、撤退の様子、撤退後の南部での出来事、解散命令後から収容されるまでの体験を聞き取っていきます。これまでにも戦跡地でのインタビューが行われたことはありますが、今回のようにひとりひとりの体験をじっくり聞きとり、記録化するのは初めてのことです。

幼少期の思い出から終戦直後までの体験を聞くことで、その人の経験や思いを追体験し、戦争体験だけではなく個々人の育ってきた背景や環境をも知る機会になっています。今回の取り組みは、生存者が証言できなくなった後のため貴重な証言資料を残す、という意味だけではなく、次世代である職員が体験者ひとりひとりと向き合える貴重な時間になっていて、それは今後の資料館にとっても大きな財産になりそうです。

この「戦跡めぐり」は今後も月 2 回程度行っていく予定です。

◆「ひめゆり学徒隊のアニメ」原画作者決定

資料館だより40号でお知らせしたように、当館では、沖縄戦におけるひめゆり学徒隊の体験や思いが小学生にも理解できるように、ひめゆり学徒隊をテーマにした短編アニメーション作品の製作を計画しています。

それに際して、作品のベースとなる原画作者を募集したところ、6月末の締め切りまでに全国より18名2団体の応募があり、のべ191枚の作品が集まりました。ひめゆり学徒隊生存者で構成する委員会と審査員丸山正雄氏（マッドハウス）、平田敏夫氏（アニメ監督）、又吉浩氏（沖縄県立芸術大学講師、アニメーション作家）、柴田昌平氏（ドキュメンタリー映画「ひめゆり」監督）の４氏の検討を経て、海津研さん、三田圭介さん、おふたりの原画作者が決定いたしました。

おふたりの原画をもとに、来年度中の完成を目指しアニメ製作を進めていく予定です。ご応募いただいた皆様には深く感謝申し上げます。

◆ 2009年度　開館20周年記念事業

当館は、2009年6月23日に開館20周年を迎えます。節目の年を迎えるにあたり、さまざまな記念事業を行う予定です。記念事業を通じて、これまで当館を支えてくださったみなさまに、あらためて感謝の意を表するとともに、20年のあゆみをふりかえり、平和への思いを新たにする一年としたいと考えています。

開館20周年記念事業（予定）

〇特別企画展「女師・一高女のあゆみ展（仮称）」2009年6月～8月
〇20周年記念講演会　2009年8月
〇レクイエムコンサート　2009年6月
〇20周年記念誌発行　2009年度中

相思樹

「顔」が見えるということ

ひめゆり平和祈念資料館　学芸員　前泊克美

十月に国際平和博物館会議参加のため広島へ行った。

会議への参加とは別に、「ソーシャルワーカー（SW）」で構成する「原爆被害者相談員の会」のメンバーと交流する機会があった。同会は、福祉に携わる者としての視点で被爆者の体験を聞き、それをもとに自分史を編む。被爆者の抱えている心の傷や痛みから目をそらさず向き合っている。その人の人生を真摯に受け止める姿勢に頭が下がる思いだった。

一方、広島では「大和ミュージアム」はじめ軍隊賛美にも見える側面とも出会った。

大和ミュージアムは当時の日本の技術力の素晴らしさを称えている。館内の証言映像では、生存者はうっとりと戦艦大和の素晴らしさを語る。遺族の証言からは、大和の乗組員であり「かっこいい海軍さん」だった夫や父や兄を誇りに思っていることが伝わってくる。だがそこからは、戦争の悲惨さはおろか、個々の乗組員の存在は、まったく見えてこない。被爆者の「顔」と真剣に向き合っている相談員の会のメンバーと、「死者／生存者」の「顔」が見えないミュージアム。「ふたつの広島」を感じることができた。

ところで、当館の第4展示室では、亡くなったひめゆり学徒の「顔」と対面できる。少女たちの遺影は、この資料館の要であり礎となっていて、訪れる人の心に深く入り込む。同時に、展示室内で語っているひめゆり学徒生存者の「顔」とも出会うこともできる。

亡くなった少女たちの「顔」を日々見つめることができ、ひめゆり学徒の生存者と日常的に関わっている私には、彼女たちの「顔」をまっすぐに見つめ、それこそ心の傷や痛みすら受け止め向き合える度量をもつことができるのだろうか。

広島の「ふたつの顔」を通して、自分に問う機会にもなった。

仲宗根政善日記抄 (40)

［1979 年］　十一月十日

藤本浄源兄が、十六年度卒業生に拾万円を寄附して帰ったので、ひめゆりの塔に思い出の想思樹を植える計画をした。安谷屋節子さん、小橋文子さん□□□□［ブランク―編集者注］が、宮里英子さんの車で、一時半頃、迎えに来てくれた。

南風原にはいり、山川の三叉路から、戦争中、南風原病院移動の夜、たどったコースを通って、ひめゆりの塔にむかった。山川の三叉路は、米軍の攻撃の目標となり、あたりは青田であったが、無数の弾痕があった。生徒たちが、負傷した学友を担架にかつぎ　ここで道を間違えて、津嘉山へ反対の方向に行ったという。

片足と両手で三つばいになって、泥んこの中をはっていた鳥取曹長を見捨てて、私たちはここまで来た。しばらく歩いていると、路ばたに小さな民家が残っていて、うすぐらい燈火がついていて、避難民であろうか、人気があった。患者たちは、すでに隊伍を乱して、マラソンの競争のように力の強いものはぐんぐん先へ進み、弱い者は、次第におくれていた。上原婦長は、一人の弱い患者に肩をかして歩いていたが、気分が悪くなったのだろう、雨にしっとりと濡れた青草の上に寝かせて注射をうっていた。われわれは、それを見捨てながら友寄へと進んだ。

十十空襲の時、妻子を家庭防空壕に残したまま、学校へ出かけて行った。射撃場東端の丘の（現在屋良朝苗氏宅　東の丘、生徒たちは、ローレライ、雲雀が丘といっていた。）小さい古墳で、野田貞雄校長のもとで、御真影を奉遷したが、入口からは空襲で、もうもうと燃え出した那覇が間近かにみえる。妻子のひそんでいる城丘に敵機が超低空して爆弾を投下し、それが、墓の入口から三つ四つとはっきり落下して行くのがかぞえられた。地ひびきがつたわる。妻子はその時、爆死したのではないかと肝をひやした。晩になって敵機は去り、那覇全市は炎々と燃え、空もまっ赤にこげた。

私は炎につつまれた街にはいり、もうもうとけぶる煙をはらいながら、妻子をおき残した家庭防空壕に飛びこんだ。衣類が散乱していて妻子の姿は見えない。周囲の家屋も草木も燃えつづけていた。しまっている玄関に、亡き母の墓前に手を会わせるようにして立ち、それから猛火につつまれた那覇市をさがし廻ったが、妻子の行方はわからなかった。二三日たって、私は東風平の友寄までさがしに来たのであった。ついにその行方がわからず、重い足どりをひきずって、学校へと帰って行った。

患者の足をひきずりながら歩いている中に加わって、十十空襲のときの悲痛な思い出をたどりながら歩いていた。後になったり先になったりして、どの生徒が、自分についていたかはもう記憶にない今日通って見ると、道の両側にはコンクリートの大きな建物が並び立っている。終戦後しばらく、この一帯はすすきに蔽われた原野になっていたが、野も至るところにコンクリートの建物が建っている。友寄からはやがてゆるやかな坂がつづいて、上りつめたところから急に右折して坦々たる道路が東風平へとつづく。この坂を登りつめた掘割りから、安室幸子（玉那覇幸子）美里キヨが、私の肩からルックサックをとって、自分の肩にかけ、砂糖きびをむいてくれて、水を民家から貰って来てはげましはげまし、私を助けてくれた。糸数ヨシ子が生き埋めになり、その救出に出かけたとき、足裏に釘がささり、それがもとで、高熱を発し、やっと二三日前からどうやら歩けるようになっていた。二人にたすけられながら、ゆっくり歩いて行った。

東風平部落の三叉路は、ひどくぬかるんでいて、道路の真中は通れなかった。生徒が数名ここで停止してうろうろしていた。児玉見習士官は薩摩隼人で気が立っていた。日本刀を抜いて、こんなところでぼやぼやしていると、たたききってしまうぞと、生徒をせき立てていた。三つばいにどろんこの中をはっていた鳥取曹長が、救われてトラックに乗せられていた。トラックの上から、先生、荷物を持ってあげましょうという。何も手をかしてあげることも出来ず、あいすまないと思っていたのに、あべこべに救助の声をかけられたのである。

安室、美里といっしょに志多伯へと歩いていた。薬品、衛生材料を天秤棒でかつぎ　喘ぎ喘ぎ前かがみになってふらふら歩いて行く小柄な生徒に追いついた。予科生の安富祖嘉子であった。安富祖はこの重い荷を、南風原陸軍病院から一人でかつぎつづけて来たのであった。与座の部落で、こわれかかった民家に立寄って小休止をとった。出発の号令のかかる直前、安富祖は遠慮しながら、先生、この荷物をここにおいて、明日とりに来てよいで

すかときいていた。私はそれ以上無理を強いることを躊躇してうなずいた。安富祖は看護隊解散後六月二十一日、喜屋武海岸、荒崎の岩かげで米軍の小銃弾で即死した。そのそばでは、平良松四郎教諭以下十一名が自決した。私はいまも南風原陸軍病院から、薬品、衛生材料を天秤棒にかついで、どろんこの道をふらふらになって歩きつづけていたこの小柄な生徒を忘れることが出来ない。

宮里さんの車に乗りながら、安谷屋節子、小橋文子□□□［ブランク―編集者注］と一高女時代のことをたのしく話ながら来たのだが、私の心の底では、ずっと移動当夜の思い出が流れていた。与座の三叉路に来て、運転している宮里さんから、右の方へですか、左の方ですかと尋ねられた。まっすぐ右へはコンクリートの大きな道路がつづいている。しかし、私は、戦争中辿った道を無意識にさした。もうこの一帯も大きな建物が並んでいて、当時のおもかげは全くない。右側には爆撃され破壊された高嶺製糖工場の残骸が残っていた。

ここからは山入端初子と二人だけになって歩いた。山入端は、南風原陸軍病院壕の中で、病氣がちで、新垣仁正教諭のはからいで、軍医室の近くにつれて来られていた。病院からここまでも私と同じようにふらふらしながら歩いて来たのであろう。二人の間は一米とはなれてはいなかった。道はひどくぬかるんでいた。突然、爆弾が破裂して、同時に製糖工場の残骸にはげしくはじける音がひびいた。同時に、山入端は、あいったと叫んで、後頭部をおさえていた。黒髪がそがれるように吹っ飛び血が流れた。弾は私のすぐ眼の前をよぎったのである。もう一二センチ山入端の後頭部にせまっていれば、重傷になり、あるいはその場に倒れたのかもしれなかった。幸い、後頭部をかすめただけで生命には異状はなかった。私はいくたびか、戦争中、運命の不思議に遭遇した。われわれの生命がいかに深淵のふちすれすれをたどって千年万年間つづいて来たかを思う。かつて、アメリカのナイヤガラ瀑布を見学したとき、瀧つぼにつき出た巌の先に、かわいい小草の花の咲いているのを見て、つくづくと自然の神秘を感じたことがあった。六月十九日の未明、伊原部落前の道路上で、砲弾で負傷したとき、頚動脈すれすれに砲弾がかすめて血がたらたら流れて意識を失った。古い傷をさすりながら、もう一二センチ頚動脈にせまっていたら、自分はあの場で最期をとげていたのである。幸い、わずかに弾がそれていたために、この生命が再びこの世の光をあび、こうして戦後を生きぬけたのだといつも生命の不思議を思う。

宮里さんの車の窓からあたりを眺めながら山入端の姿をうかべた。山入端は、波平の壕でいっしょだったのか、その後の記憶もうすれてない。どこで最期をとげたか不明である。今、九十才になる山入端の老母が健在で、国頭村宜名真の海べに住んでおられるという。先年、卒業証書を授与したとき、お友だちがわざわざ宜名真まで訪ねて行って、老母に卒業証書を渡された。老母は、涙を流してよろこんで下さった。老母はまだ初子さんがどこかに生きていることを信じているという。必ず子供を抱いて帰ってくると期待しているという。母親は永遠に、わが子を懐に抱きつづけたいのである。

車は坂をあがりかけていた。右側に木がこんもりしげっていて、滾々と水の流れる音が聞えた。そこが与座泉［ヨザガー］ですよと指さした。

与座川の清水にあびて我死なむ　望みたえたる

戦に追はれ戦争中、あの滾々と湧きあふれる清水の音を聞いたとき、私はほんとうにそう思った。幾十日もまっくらい壕の中で暮した。重症患者がうめき、つぎつぎと死にたえて行く。ああどこか大洋の真中の小島の磯に出てさんさんと照り輝く日光に浴したい。青い空、海にむかって両手をあげて大気を思う存分吸って見たい。まるで凍死する者が幻想をえがくように、このこんこんと湧き出る泉につかってそのまま死んでしまいたかった。

泉の湧口近くに血にそまった繃帯がちらかっていた。おそらく清水に口づけたまま最期をとげた患者の繃帯にちがいなかった。生徒がもしくはここで負傷したのではないかとの不吉な不安があった。真壁についてから、予科の大城信子［大城ノブ―編集者注］が、与座で爆死したことを知らされて、この泉の清水を飲みながら戦死したのはてっきり大城と思った。

平良進兄の手記を読み、はじめて、その最期の様子を知った。大城が戦死した場所は、山入端と二人があやうく生命をとりとめた付近であったようである。大城の遺体は平良進氏などによって丁重

に埋められたことをはじめて知った。移動の夜、途中で犠牲になったのは、大城一人であった。与座泉を過ぎて、車はやがて丘を登りつめて展望が開けた。移動の夜、ここに達したとき、ほっとした。ふりかえると、首里方面は、照明弾が星のようにあがり、与座丘、八重瀬岳には、糸満方面から艦砲弾がたえずヒューヒューと飛んでいた。われわれはそのかげを通っているので、もう身の危険を感じなくなっていた。あの夜の思い出をもっている時には、秋の空はまるで夢のようであった。流れる雲の色がまるで現実とは思われないかがやきを思っている。死からさめてはじめて眺めるのにも似た美しい色だった。今日までいくどか、この道をたどったことがあるのだが、死を思いつづけて来たせいなのか、眼もくらむように空はあかるかった。

大里部落の道の両側も戦争中の石垣はもうなくなり、ほとんどコンクリート塀になり、茅葺瓦葺も全く見られなくなり、ブロック建築にあらたまっている。この道路に繃帯がちぎられて、後から辿って来る患者たちの道しるべになっていた。民家には人のけはいは全くなかった。おそらく皆壕の中にひなんしていたのであろう。

美里と安室たちは、道のそばの泉のところで小休止をしていた。ここからは山里美代子が私をたすけてくれて二人でとぼとぼ歩いた。やがて嘉手志川を過ぎて、橋のてすりに上りかかって二人も小休止をした。南山城址のもとで別の一隊の生徒たちであろうか、人の気配が感じられた。二人はやがて歩き出した。今は坦々たる道路になって道はばも広げれられている。当時は、大八車がやっと通れるぐらいの石道であった。疲れきった足をひきずりひきずりゆるやかな坂を登って行った。今は東側は草木をきり払われて岩が露出し、すすきがあちらこちらに伸びている。何県の塔であろうか慰霊塔がある。

移動の夜ここに来てはじめて野の蛙の鳴き声を聞いた。東天も次第にしらみかけたのであろうか。弟は幼少の頃、病弱だった。その栄養補給のために、私は毎日のように田圃へ行って蛙を捕えて、その股肉をいって弟にくれた。蛙の鳴き声を聞いていると、私は蛙の股肉を思い出した。あの蛙をとって生きられる。うえつゞけて来た私はそんなことを考えついた。遠くで砲声はいんいんと鳴りとどろいていたのである。

山里にたすけられるようにして小さい石橋まで来た。二人はしばらく、石橋にこしをかけた。雨水が静かに小橋の下を流れていた。明日は天気ですねと山里がいう。山里が私もぐったり疲れていることをはじめて氣がついた。山里は肋膜をわずらって、しばらく休学をしたことがあった。医者の家に生れ、看護には、経験もあったので、陸軍病院壕内でも、皆から重宝がられた。とくに上原婦長から信用されていて、その手足になってまめに働いていた。移動の時刻がせまったとき、私は、どうしても狩俣キヨと久田祥子に連絡しなければならないと思った。しかし、敵兵は間近かにせまっているし、狩俣許田(ママ)のいる二十四号壕までは、敵兵にむき出しであった。雨のためつるつるすべるし、遮蔽物一つない。砲弾の雨をくぐってたどりつくことはほとんど不可能に近かった。私が途方にくれていると、山里はつかつかと寄って来て、先生私が連絡に行って来ますという。その悲壮な眼をみつめていると、どう返事していいかわからなかった。移動の時刻は刻々せまっている。連絡はしなければならない。行ってくれるかと言うと、はい行って来ますと、勇み立って、壕を出て、砲弾の中へと飛んで出たのである。しばらくして、壕にかけこんだ。先生久田さんがまた負傷しましたという。久田はあらたに負傷した傷をいたそうにおさえながらやっと壕にはいって来た。しかし、狩俣はとうとう壕に置き残さなければならなかった。久田は、狩俣といっしょに残るつもりでいたが、山里にはげまされてやっと壕にとどいて生への道をたどることが出来たのである。私が高熱を発していたときも、弾雨の中を水を汲んで来て頭をひやしてくれた。そうして今私をかばって真壁入口までたどりついたのである。精魂盡きたというようにして、小橋にもたれていた。濁水が橋の下を流れていた。それから最後まで山里は私のそばをはなれなかった。波平の壕でもいっしょだったが、ずっと寝てばかりいた。ろく膜が再発したのかもしれなかった。すっかりしょうすいしていた。　［つづく］

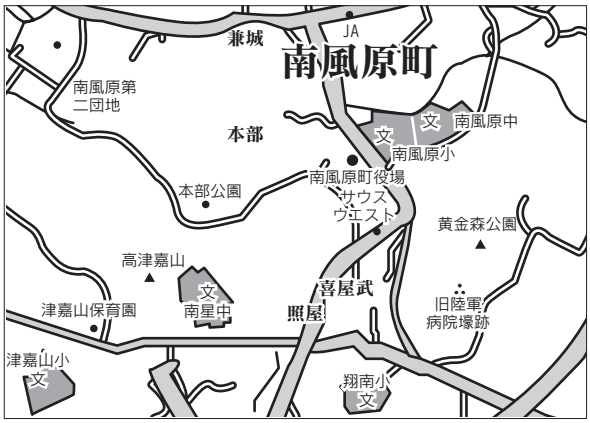
※読みやすさに考慮して、仮名遣い、旧漢字、句読点、改行などを改めた箇所がある。また、明らかな誤字は改めた。

ひめゆり学徒隊の戦跡

No. 2　兵器廠壕

所在地：南風原町
規　模：一番大きな壕は約 100 m、小さい壕は約 15 m（高さ 2 m × 幅 2 m）
部　隊：第 32 軍野戦兵器廠

①今回、口が開いたのは翔南小学校運動場南西の菜園。



②付近の現況図

③陥没のため口が開いた部分。

(1)　概　要

・沖縄陸軍病院が使用した兵器廠の壕は、南風原町字喜屋武の製糖工場近く(現在の翔南小学校付近)に掘られていた。
・その壕に勤務した大見祥子さんや与那覇百子さんの記憶では、壕の数は 3 ～ 4 本だったそうだが、地元の人よれば、兵器廠の壕はそれ以上の数があったようである。
・第 32 野戦兵器廠は、兵器・弾薬の保管、補給、修理を任務とする部隊。1944 年 11 月 6 日、字喜屋武付近に開設され製糖工場などに弾薬を保管するなどした。1945 年 3 月 24 日、同隊を戦闘部隊とするため、特設第 3 連隊を編成した(元の任務も続行)。4 月 20 日には部隊の一部(120 人)を残し、大里、糸満へ移った。これにより使用されなくなった壕を沖縄陸軍病院が病棟にしたと考えられる。ひめゆり学徒たちが勤務していた時には、すでに兵器類はなかったようである。
・2006 年 2 月 6 日～ 10 日、陥没によって壕の一部が現れたのに伴い、南風原町により確認調査が行われたのが、これらの写真である。

(2)　この壕の特徴

・黄金森の陸軍病院よりやや狭いつくりになっている。

(3)　壕からの出土品

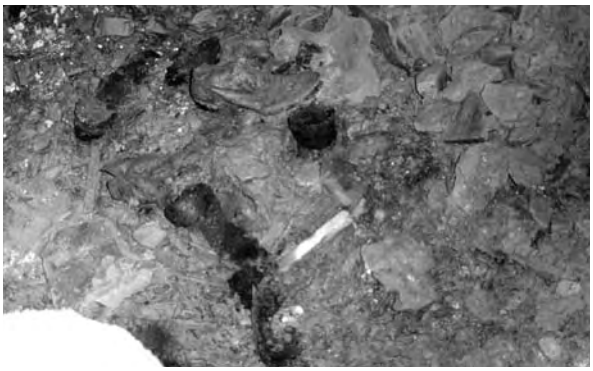
・発掘調査を行っていないため、出土品はなし。

同壕に配置された大見祥子さんの証言より

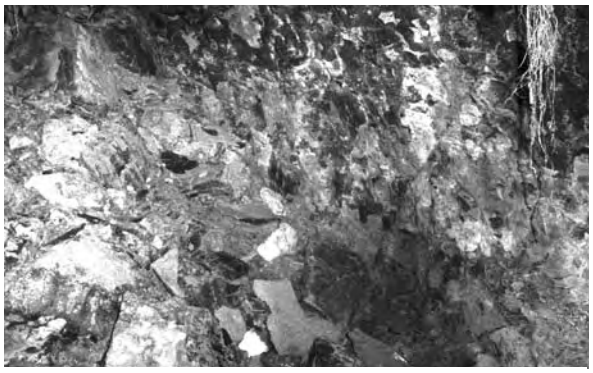
（敬称略）

・この壕には沖縄師範学校女子部の 8 人が配属された。
・大見らがこの壕に来たときには、壕内にサトウキビの殻が散乱していた。軍医も看護婦も来ず、食糧がないため、仕方なく歩ける患者がサトウ

④壕口から北東の方向へ進む



⑤壕内には歯ブラシや石けん箱などが落ちていた。



⑥壁には壕を掘った際のつるはしの跡がくっきりと残っている。長い間埋まっていたせいか、壕の保存状態はよい。

⑦壕奥から入口を見たもの。

キビを採ってきて食糧にしたという。

・患者の包帯を外すと、何日も治療されてないため膿と蛆がいっぱいで、あまりの臭気に何度も失神しそうになった。

・ある患者が壕内で自決してしまって、そばに寝ていた患者までとばっちりを受けて負傷してしまったことがあった。

同壕に配置された与那覇百子さんの証言より

（敬称略）

・与那覇はこの壕に配置される前、第一外科の 14 号壕で勤務していたが、壕に直撃弾が落ちて大惨劇となり、患者や看護婦、学徒の多数が死亡した。その後、与那覇は 7 号壕の上原婦長のところへ連れて行かれて介抱された。

・回復した後、与那覇は天願軍医らによって兵器廠壕へ連れていかれた。兵器廠には「軍医もいるんだ」と喜んだが、すぐに帰っていった。がっかりした。

・与那覇が兵器廠壕に来た時、すでに師範の先輩たちが勤務していた。

・3 本あったと記憶している兵器廠の壕の中で、一番大きな壕には大見、美里（以上本科 2 年）、宮平トヨ、友利ハツ（以上本科 1 年）、与那覇（予科 3 年）、宮国節子（予科 2 年）の 6 人、隣の壕には比嘉秀、古堅ハルらが入っていた。壕前には喜屋武集落があった。

・与那覇たちが入った壕はクの字の形をしていた。

・死体埋葬を朝晩やった。弾が激しく、朝患者におにぎりを配ることができなくて、朝の分を夕方に配ったこともあった。食料を収集するためにサトウキビを取りに行ったが、焦げた根っこぐらいしか残ってなかった。

・負傷兵は悲惨だった。治療班も来ず、包帯もそのままで、ほったらかしだった。心臓をやられた兵隊は背中から泡が出ていた。両腕をやられ顎をやられた兵隊は手が使えないから、顎にうじがわくと自分でフーフーと息を吹きかけ払いのけていた。

・兵器廠に来てしばらくして、宮国節子に「隣の壕で牛を殺しているから食べに行かない？」と誘われた。行ってみたらシンメーナービがあった。でも中身はほとんどなくて、底に少しお汁が残っていて食べた。その壕は小さい壕で、患者はいなかった。

（学芸員　普天間朝佳）

本　棚

（琉球大学教授　仲程昌徳）

『具志川市史第五巻戦争編　戦時体験Ⅰ・Ⅱ』

一九六七年十月に始まる戦争体験の聞き取り調査が『沖縄県史第９巻各論編８　沖縄戦記録Ⅰ』に結実し、刊行されたのが一九七一年六月。以後『沖縄の慟哭　市民の戦時戦後体験記（全）那覇市』（一九八一年三月）を始めとして各市町村、さらには字単位の戦時体験記録の刊行が数多く見られるようになるが、二〇〇五年三月には『具志川市史第五巻戦争編戦時体験Ⅰ・Ⅱ』が刊行されている。『沖縄戦記録Ⅰ』から三十数年を経て、『具志川市史』が「戦時体験Ⅰ・Ⅱ」を刊行しなければならなかったのは『沖縄戦記録Ⅰ』に具志川市民の戦時体験談が全く取られてなかったということもあろうが、それだけではない。『沖縄戦記録』に見られる具志川関係記述といえば、「具志川村民は、米軍が石川、東恩納方面から進撃してきたので、あわてて夜中に山原方面へ避難した」といったこと、或は「具志川村は、戦闘中米軍の後方基地として田場、天願、宇堅、西原の各部落に兵舎が設営され、数万の部隊が駐屯していた。そのため戦火を免れていた部落内の家屋は焼き払われたり取り壊され、多くの宅地、耕地がブルドーザーで敷きならされてしまった」といったようなものである。大枠としてそれは間違いではない。具志川市二六字、二一〇名の談話（うち手記一〇）に目を通してみて、そのことはよくわかるが、具志川市民には具志川市民の戦いがあったし、それは埋もれたままにしていていいものではなかった。

具志川村に駐屯したのは北海道出身者を主体とした部隊であった。軍隊の駐留、供出、徴用、軍事訓練等いずれも他の市町村と変わるものではなかったが、具志川村一体が苛烈な戦闘を免れたのは、米軍が沖縄本島に上陸したとき、駐留していた日本軍がすでに移動してしまっていたことによる。そのことの意味するのは、軍隊のいないところでは戦闘は起らないということであるが、しかし、一旦戦争になると、前線も後方もなくなる。具志川でも字具志川や字赤道で「集団自決」が起っていたことは、そのことをよく示すものであったし、村民の多くがデマに踊らされたのもそうであろう。

『具志川市史第五巻戦争編戦時体験Ⅰ』が貴重なのは、後方は後方で、いかなる苦心を強いられることになるかをよく語るものとなっているからであるが、数多くの死者を出していく中で具志川村民がよく生き残れたのには「白旗」と「ハワイ帰り」があった。証言には「白旗」を掲げることをどこで学んだかについての記述はないが、多くの村民が「白旗」を掲げて投降しているし、「ハワイ帰り」やその他の「外国帰り」が各字で投降の先導役を果たしていた。そのことは、具志川村が、移民の多い地域であったことを示している。『具志川市史第五巻戦争編戦時体験』が「Ⅰ」だけでなく「Ⅱ」も同時に編まれなければならなかった所以である。

「Ⅱ」は中国・シベリア、ブーゲンビル島、フィリピン南洋群島（サイパン島、テニアン島、ポナペ島、パラオ島、その他）、朝鮮、海南島、台湾、ハワイ、ブラジルといった外国に出て行った具志川村民の戦争体験談一〇八編を納めると同時に学童疎開の記録六四編が収められているが、それは具志川村民というよりも沖縄県民が戦争ということでいかに悲惨な体験を強いられたかをよく示すものとなっていた。

戦争の悲惨さは学童疎開で親元を離れていった子供たちが餓えにさらされていく姿に象徴されるといってもいい。そして戦争が無惨なのは、決して戦闘地域、戦争時だけではないということである。それは、「勝ち組」「負け組」についての証言が語っている通りである。「勝ち組」「負け組」の確執はブラジルだけにあったのでなくハワイでもあったし、サイパン、テニアンでもあった。戦争は終っても、なお続いた事件に関する談話を読むと、慄然たる思いをする。それ以上に、不気味さが漂ってくるのは、日本が戦争を始めたのではないと強弁する人々の姿が「勝ち組」に重なってしまうからであるが、「戦時体験」から伝わってくるのは、そのような人の声が、いかに危険であるかということに他ならない。

声

自分に今、何ができるかが問われている

静岡県　50 代　看護師

私は夫婦で　ひめゆりを見学に行きました。

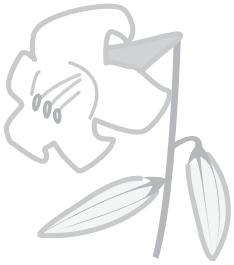
戦争でお国のためとはいえ若い命がたえた事は、時代とはいえ大変残念な事と思います。

その時代に生きて行くのは女性が大変な事と思いますが、今ではその人生の大切さや命を大切にしない人が多くなってきているように思うこのごろです。

私は中学生に体験学習の時には命の大切さを、自分の経験もふまえて、自殺はしてはいけないと学生には呼びかけています。今までお父さんやお母さんがどれだけあなた達を愛情をもって育ててくれたのかも伝えて行く事も大切な事だなぁと思っております。

このひめゆりを見学した時には、私自身もみんなの中だったらどうしたかなぁと思いました。資料館も調査するには大変な人の手がかかり、時間も大変だった事と感動して、涙が出そうになり、自分に今、何ができるかが問われているように思い、1 日、1 日を大切にして、人と関われる仕事をもっていてよかったと思います。昔があるから今の私達がある事に感謝しなくてはなりませんね（大変いい物を見せていただきありがとうございました。）

お体を大切にみんながんばって下さい。



資料館ガイド

◆資料館ご利用案内

①入館受付　午前９時～午後５時　閉館　午後５時 25 分
②休 館 日　年中無休
③入 館 料　大人￥300　高校生￥200　小・中学生￥100
　　団体 20 名以上、10% 割引
④交　　通　那覇から糸満市行きのバス㊾で約 30 分、さらに糸満バスターミナルから㊷㊼㊽のバスで約 15 分、「ひめゆりの塔前」バス停下車。

◆多目的ホール利用の手引き

1．多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話や証言ビデオ（各 25 分）を視聴することができます。
2．ホールの予約は、１年前（その月の１日）から受付します。
　→例：来年 10 月 31 日までの受付は、今年 10 月 1 日より受付開始。
　※予約の締切日は、１週間前とさせていただきます。（電話申込時間　9：00 ～ 17：00）
3．講話については **1 日の回数が 2 回（1 団体 40 名以上）**と制限されています。
　また、**月曜日は講話なしでビデオのみの受付となっておりますのでご了承下さい。**
4．講話の受付時間　　9：30 ～ 15：00
　ビデオの受付時間　　9：00 ～ 16：00
5．**ご予約は空き状況をご確認後お申し込み下さい。受付は先着順で、資料館窓口、電話でお願いします。いずれの場合も後日確認の為、文書をお送り下さい（ＦＡＸ可）。**
6．ホールの収容人員は 200 人（席）です。
7．ホールの利用は、入館していただく場合に限ります。講話･ビデオ以外には使用できません。
8．講話は､原則として当番の証言員が対応します。また､講師謝礼及び施設使用料等は頂いておりません。
9．年末年始（12 月 30・31 日、１月１日～３日）、旧暦７月 13 日～ 15 日（お盆）は、証言員が休みのため講話はできません。また、慰霊祭の前後、６月 21 日～ 24 日はビデオ上映会を行いますので、予約はできません。
10．ホール予約の方は、来館当日、窓口にその旨をお知らせ下さい。

ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより　第 42 号
2008 年（平成 20 年）12 月 31 日発行
編集・発行　（財）沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館
資料館　〒 901-0344　沖縄県糸満市字伊原 671-1　☎ 098-997-2100
同窓会　〒 902-0067　沖縄県那覇市安里 388-1　☎ 098-884-1115
URL　http://www.himeyuri.or.jp/